

「ヨハネの人生」

マルコの福音書 1:6~8

はじめに

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:1 神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。

1:2 預言者イザヤの書にこのように書かれている。「見よ。わたしは、わたしの使いをあなたの前に遣わす。彼はあなたの道を備える。

1:3 荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ。』そのとおりに、

1:4 バプテスマのヨハネが荒野に現れ、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣傳えた。

1:5 ユダヤ地方の全域とエルサレムの住民はみな、ヨハネのもとにやって来て、自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。

前回のメッセージで、バプテスマのヨハネという人物の存在とその働きが、罪の苦しみに叫ぶ人々に応えられた神が、天から降りて来られて身代わりの死を遂げられるという、神の御子イエシュアを指し示しているということを述べました。また 1:5「ユダヤ地方の全域とエルサレムの住民はみな、ヨハネのもとにやって来て」という、一見誇張表現ではないかと思われる記述に、終わりの日に地上に再臨されるイエシュアが、全てのユダヤ人たちを集めるという預言が「型」として表されているとも述べました。

【新改訳 2017】

ミカ書

2:12 ヤコブよ。わたしは、あなたを必ずみな集め、イスラエルの残りの者を必ず呼び集める。わたしは彼らを、囲いの中の羊のように、牧場の中の群れのように、一つに集める。

このように、これは聖書に記されている全ての預言者たち（偽預言者ではない）にも言えることですが、ヨハネはイエシュアの前ぶれをする（ルカ 1:17）者、すなわちイエシュアがどのような御方で、何をなされるのかということをもっと教える、「型」として表す存在であると言えます。ですからここに筆者であるマルコは確かにバプテスマのヨハネについて、彼がどのような人物であったのかを述べているのですが、私たちが読み取らなければならないことは、ヨハネという人物、人格についてではなく、彼の姿、言動、そして彼によって引き起こされる出来事の中に表されている、いや隠されているメシアであるイエシュアについての情報、知識を探り求め、それに目を留めることが重要であると思われます。特に今回はこのヨハネの見た目、外見に指し示されたイエシュアについてのメッセージです。

1. エリヤ

1:6 ヨハネはらくだの毛の衣を着て、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。

「らくだの毛の衣」、「革の帯」。ヨハネはなぜこのような服装をしていたのでしょうか。聖書を見る限り、彼と同じような格好をしていた人物に預言者エリヤがいます。

【新改訳 2017】

Ⅱ 列王記

1:7 アハズヤは彼らに尋ねた。「おまえたちに会いに上って来て、そんなことを告げたのはどんな男か。」

1:8 彼らが「毛衣を着て、腰に革の帯を締めた人でした」と答えると、アハズヤは「それはティシュベ人エリヤだ」と言った。

1:9 そこでアハズヤは、五十人隊の長を、その部下五十人とともにエリヤのところに遣わした。隊長がエリヤのところに上って行くと、そのとき、エリヤは山の頂に座っていた。隊長はエリヤに言った。「神の人よ、王のお告げです。下りて来てください。」

1:10 エリヤはその五十人隊の長に答えて言った。「私が神の人であるなら、天から火が下って来て、あなたとあなたの部下五十人を焼き尽くすだろう。」すると、天から火が下って来て、彼とその部下五十人を焼き尽くした。

この箇所は「毛衣を着て、腰に革の帯を締めた人」であるエリヤが、当時サマリヤ（北イスラエル）の王であったアハズヤの死を宣告した場面です。この宣告に怒ったアハズヤ王は 50 人の兵を差し向け、エリヤを捕えようとしています。しかし「天から火が下って来て、彼とその部下五十人を焼き尽くした。」という、何とも恐ろしい場面です。このように「毛衣を着て、腰に革の帯を締めた人」には、天から火を下す人というような意味合いがあると考えられます。つまりイエシュアとはそのような御方であるということです。実際にイエシュアはご自分について

【新改訳 2017】

ルカ 12:49 わたしは、地上に火を投げ込むために来ました。

と語っておられます。この「火」とは、聖霊の火のことであると考えられます。なぜならこの後の節 1:8 でヨハネはイエシュアについて「このお方は聖霊によってバプテスマをお授けになる」と述べているからです。そして「毛衣を着て、腰に革の帯を締めた人」であるエリヤによって 50 人の兵士の上に天から火が下って来た出来事と、この「聖霊のバプテスマ」を結びつけるような出来事が使徒の働き 2:1~3 に記されています。

【新改訳 2017】

使徒の働き

2:1 五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた。

2:2 すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。

2:3 また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった。

「五旬節」とは七週の祭りとも呼ばれ、過ぎ越しの祭りが終わって「50」日後に行われる祭りのことです。これがエリヤを捕えに行った兵士が 50 人であったことに結びつくと考えられます。イエシュアは過

ぎ越しの祭りの時に十字架にかかれ、死んで三日目によみがえられました。その日から数えて 50 日目、「五旬節」の祭りの日に「天からの激しい風」、「炎のような舌」である聖霊が弟子たちの上を下ることが、「毛衣を着て、腰に革の帯を締めた人」エリヤによって起こされた出来事の中に「型」として表されていたと考えられます。このようにエリヤもまたイエシュア存在とその働きを指し示す預言者であったと言えます。

2. らくだの毛衣

ちなみに「毛衣」のことをヘブル語でセーアール(רֵצֵץ)と言いますが、この言葉が聖書で最初に使われた箇所は創世記 25:25 になります。

【新改訳 2017】

創世記

25:25 最初に出て来た子は、赤くて、全身毛衣のようであった。それで、彼らはその子をエサウと名づけた。

25:26 その後で弟が出て来たが、その手はエサウのかかとをつかんでいた。それで、その子はヤコブと名づけられた。

この記述はアブラハムの子イサクから生まれた双子、エサウとヤコブについてのもですが、ここで「全身毛衣のようであった。」と訳されている箇所に最初のセーアールが使われています。これはヤコブの兄エサウについてのもですが、ここで聖書は彼を「最初に出て来た」または「赤い」子と記しています。この「最初に」と訳されているヘブル語はローシュ(רֵשֶׁת)「頭、かしら」という意味の名詞の派生語、そして「赤い」にはアーダーム(אָדָם)「人」という名詞の派生語がそれぞれ使われており、「毛衣」セーアールには本来「頭」すなわち王、指導者である「人」、あるいは「人」となられた王という意味合いがあると考えられ、これはいずれもやがて全世界を治められる王の王、主の主であるメシアであるイエシュアを指し示していると考えられます。またヨハネの着ていた「毛衣」は、「らくだ」ヘブル語でガーマール(גָּמָל)のものであったと記されていますが、これと同じ綴りでガーマル(גָּמַל)「乳離れる」という意味の動詞があります。「乳離れる」とは子どもの成長、成熟を指し示し、同時に親から「離れる」ことを指し示します。このように解釈するならば、この「らくだ」にも、天の御父のみもとを「離れ」、この地に来られる御父の御子であるイエシュアの姿が指し示されていると考えられます。

3. 革の帯

また「革の帯」について。「革、皮」はヘブル語でオール(אֵל)と言ひ、その最初の記述である創世記 3:21 に本来の意味があると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

3:21 神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。

3:22 神である【主】はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

3:23 神である【主】は、人をエデンの園から追い出し、人が自分が取り出された大地を耕すようにされた。

神である主は、「皮の衣」をアダムとその妻に「着せ」、そして彼らをエデンの園から「追い出」しました。これは一見、神の命令に背いたアダムとエバが、罰としてエデンの園を追い出される出来事のように見えますが、この3:23で「追い出す」と訳されているヘブル語シャーラハ(שָׁרַח)は本来前節の3:22で「手を伸ばして」と訳されている言葉で、ある目的のために「派遣する、遣わす」という意味を持った言葉であると考えられ、そのために着せられたのがオール「革、皮」であると考えられます。このオールは動物の皮だけでなく、人間の皮膚をも指します。ですからこの出来事の中に、「人の『皮』を着せられ、地に遣わされる」というメッセージを導き出すことができ、これもまた神の御子イエシュアが、人の姿となって地に来られることを指し示す「型」であると考えられます。

このように、バプテスマのヨハネが「らくだの毛の衣を着て、腰に革の帯を締め」ていたという記述には、神から遣わされた、神の御子イエシュアとその働きが指し示されており、単にこのヨハネという人物の特徴を記しただけのものではないということが解ります。

4. いなご

次にヨハネは「いなごと野蜜を食べていた。」とあります。最近の日本では「いなご」を食べる人はほとんどいなくなりましたが、昔は貴重なタンパク源として多くの人に食べられていたようです。私も幼い頃、祖父が時々いなごを捕まえて、フライパンで醤油をかけて炒めて食べさせてくれたことを覚えています。旧約聖書の律法において、イスラエルの民にはいくつかの食物規定、すなわち食べて良いものといけないものに関する教えがありました。そこにこの「いなご」ヘブル語でハーガーヴ(חֲגַב)についての最初の言及があります。

【新改訳 2017】

レビ記

11:22 それらのうち、あなたがたが食べてもよいものは次のとおりである。いなごの類、毛のないいなごの類、コオロギの類、バッタの類。

ここで「バッタ」と訳されているのが聖書で最初のハーガーヴです。このようにハーガーヴは神がお定めになった食物規定の中で「食べてよいもの」とされています。またハーガーヴは小さい生き物の代名詞として以下のようにも使われています。

【新改訳 2017】

民数記

13:32 彼らは偵察して来た地について、イスラエルの子らに悪く言いふらして言った。「私たちが行き巡って偵察した地は、そこに住む者を食い尽くす地で、そこで見た民はみな、背の高い者たちだ。

13:33 私たちは、そこでネフィリムを、ネフィリムの末裔アナク人を見た。私たちの目には自分たちが バッタ のように見えたし、彼らの目にもそう見えただろう。」

これはモーセの時代、エジプトを脱出したイスラエルの民が、約束の地カナンに入る前に遣わした偵察隊の言葉ですが、彼らはそこでネフィリム、背の高い巨人のような者たちを見、自分たちが「バッタ」ハーガーヴのように小さく見えたと言っています。このようにハーガーヴ「いなご」を食べるとは、どんな小さな規定、神の戒めをも守る、という意味合いがあると考えられます。実際にイエシュアはこのように語られました。

【新改訳 2017】

マタイの福音書

5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っ**て**はなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。

5:18 まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。

5:19 ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを行い、また行うように教える者は天の御国で偉大な者と呼ばれます。

このように、イエシュアとは律法や預言者すなわち聖書に記された戒めの最も小さいものをも守り、またそれを守り行うように教える「天の御国で偉大な者」であることが解ります。律法に記された最も小さな食物規定である「いなご」ハーガーヴを食べたバプテスマのヨハネの姿に、「律法の一点一画」すべてを「成就、実現」させる御方であるというイエシュアの存在と働きが表されていると考えられます。

5. 野蜜

またヨハネは「いなご」だけでなく「野蜜」をも食べていたと記されています。野の蜜と訳されていますが、ヘブル語ではヤアル(יָאֵל)「茂み、森林、蜜蜂の巣」のデヴァシュ(דְּבַשׁ)「蜜」となっており、花の蜜や蜂蜜というだけでなく、ナツメヤシやイチジクのような果樹の果実や果汁をも指すようです。「蜜」デヴァシュという言葉は旧約聖書で 53 回使われていますが、明確に「茂み、森林」ヤアルの「蜜」と記されているのは以下の I サムエル記 14:25 のみです。

【新改訳 2017】

I サムエル記

14:24 さて、その日、イスラエル人はひどく苦しんでいた。サウルは、「夕方、私が敵に復讐するまで、食物を食べる者はのろわれよ」と言って、兵たちに誓わせていた。それで兵たちはだれも食物を口にしていなかったのがあった。

14:25 この地はどこでも、森に入ると、地面に蜜があった。

14:26 兵たちが森に入ると、なんと、蜜が滴っていたが、だれも手に付けて口に入れる者はいなかった。兵たちは誓いを恐れていたのである。

14:27 しかし、ヨナタンは、父が兵たちに誓わせたことを聞いていなかった。彼は手にあった杖の先を伸ばして、蜜蜂の巣に浸し、それを手に付けて口に入れた。すると彼の目が輝いた。

14:28 兵の一人がそれを見て言った。「あなたの父上は、兵たちに堅く誓わせて、『今日、食物を食べる者はのろわれる』とおっしゃいました。それで兵たちは疲れているのです。」

14:29 ヨナタンは言った。「父はこの国を悩ませている。ほら、この蜜を少し口にしたので、私の目は輝いている。」

この箇所は、イスラエルとペリシテとの戦いを記した一場面ですが、この時イスラエルの王であったサウルは、イスラエルの民である兵士たちがその地のヤアル「森」にあるデヴァシュ「蜜」が豊かにあったにもかかわらず、それを口にすることを、のろいをかけて禁じていました。そのため「イスラエル人はひどく苦しんでいた」、また「兵たちは疲れて」いました。そこでサウルの息子ヨナタンは「父はこの国を悩ませている」と言い、サウルに背いてその「蜜」を食べてしまいます。するとヨナタンの「目が輝いた」という出来事が記されています。この出来事は一つの「型」として以下のように置き換えることができます。

サウル王 → ユダヤ人の指導者たち

のろい → 律法主義

滴る森の蜜 → 神の御言葉が人となってこの地を歩まれた御方、イエシュア

ヨナタン → イエシュアを信じる者

目が輝く → 神の御心を知る

イスラエルの民、ユダヤ人たちは当時の指導者たち、パリサイ人や律法学者たちのもたらした律法主義によって、聖書の持つ本来の意味である神の御心、お約束、ご計画が見えなくなってしまっていました。それがサウルの命令によってイスラエル人が「ひどく苦しめられ」、「疲れ」、「悩ませて」という箇所に表されていると考えられます。そこに「滴る蜜」の存在、この「蜜が『滴っていた』」と訳されている名詞ハーレフ(חֲלֵף)は、「旅人」という意味もあり、「歩く」という意味の動詞ハーラフ(חָלַף)の派生語で「歩く蜜」とも訳せる、これはまさに神の御言葉が人となってこの地を歩まれた、イエシュアの姿が指し示されていると考えられます。なぜなら神の御言葉は聖書においてしばしば「蜜」にたとえられるからです。

【新改訳 2017】

詩篇 119:103 あなたのみことばは私の上あごになんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。

そしてこの人となった神の御言葉である、イエシュアという「蜜」を口にすると、受け入れる、信じる者は、このヨナタンのように「目が輝く」すなわち神の御言葉に対して目が開かれる、聖書に記された神の御心を知ることができるようになるということが指し示されていると考えられます。

6. 力のある方

1:7 ヨハネはこう宣べ伝えた。「私よりも力のある方が私の後に来られます。私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格也没有せん。

そしてヨハネはその外見だけでなく言葉においてもイエシュアを表してその第一声に「私よりも力のある方」と述べています。では「力のある」とは一体どういう意味でしょうか。ヘブル語ではここにハーザク(חָזַק)「強くする」という意味の動詞が使われています。ではこのハーザクの最初の言及からその本来の意味を考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】

創世記

19:15 夜が明けるところ、御使いたちは口トをせき立てて言った。「さあ立って、あなたの妻と、ここにいる二人の娘を連れて行きなさい。そうでないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまいます。」

19:16 彼はためらっていた。するとその人たちは、彼の手と彼の妻の手と、二人の娘の手をつかんだ。これは、彼に対する【主】のあわれみによることである。その人たちは彼を連れ出し、町の外で一息つかせた。

この箇所は「この町の咎のために滅ぼし尽くされて」しまう、ソドムとゴモラの町に起こった出来事です。アブラハムの甥の口トはこの町の住民でしたが、「彼に対する主のあわれみに」より、町の外に連れ出されます。ここで口トが「ためらっていた」という箇所は聖書で最初のハーザクが使われており、直訳すると「強くすることを遅くした、遅れさせた」となります。この出来事において「強くする」とはソドムとゴモラという罪の町、滅びの町から出る、出て行くことを意味します。実際口トは御使いたちに手をつかまれ引き出されるという形でその町を出て行きました。このようにハーザクとは本来、罪の中から引き出す、滅びゆく定めから逃がす、解放するという意味合いがあると考えられ、イエシュアとはまさにそのような御方であるとヨハネは述べていると考えられます。

7. 型

それに対してヨハネは自身の役割、働きについても「解く、解放する」という言葉を用いて表現しています。しかしイエシュアのなされる解放の御業に比べれば自分のそれは、くつのひもを解くような程度にも及ばないほどの小さなものであると述べており、まさに足元にも及ばないということを言い表しているのだと考えられます。

1:8 私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになります。」

ヨハネは自分の存在と働きが、イエシュアのそれと比べて、その足元にも及ばないことを言い表した上で、この言葉を語っているということは、イエシュアの与える聖霊のバプテスマがいかに重要でしかも偉大な御業であり、それに比べて自分のしていること、すなわち水のバプテスマがいかに小さなものであるかということ述べているのだと考えられます。たしかに彼の授けた水のバプテスマによって、奇蹟ある

いは人々に劇的な変化をもたらしたという記述はありません。また彼の身なりや食生活について、筆者マルコはあえて記してはいるのですが、彼が身に着けていた「らくだの毛衣」も「革の帯」も、それ自体には何の変哲もない、ごく普通のものでしたし、彼が食べていた「いなごと野蜜」についても、何か特別な知恵や力が与えられるような、そんな物ではありませんでした。つまりそこに重要な意味やメッセージがあったとしても、彼の存在も働きも、すべてはこれからイエシュアがなそうとしておられる偉大な御業を指し示す「型」にすぎなかったということです。「私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格ありません。」と言ったヨハネは、そのことをよく理解していたと思われます。

人は良い成績や優れた結果を残そうとして働きます。それによって利益を得たり、人に賞賛されたりすることを欲するためです。しかしヨハネは、そのようなことには目もくれず、その働きはもちろんのこと、外見から食生活に至るまで、人生のすべてをただイエシュアを指し示す「型」としました。正確には神が彼をそのようにお立てになったのです。このヨハネについて、イエシュアもこう述べておられます。

【新改訳 2017】

マタイの福音書 11:11 まことに、あなたがたに言います。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした。

人にとって最も偉大な人生、それはこのヨハネのように、イエシュアを指し示す「型」としての生き方です。では私たちはこのヨハネのような偉大な人生を生きることが求められるべきでしょうか。そうではありません。述べたように、彼は神によってそのように立てられたのです。その目的はイエシュアを指し示し、人々がイエシュアに目を留めるようになるためです。ですから私たちが目を留めるべきはヨハネの偉大な人生ではなく、彼が指し示した神の御子メシアであるイエシュアの存在とその偉大な御業についてであると信じます。イエシュアに目を留める人生、その存在と御言葉、御業だけに目を留める生き方、それこそが私たちに与えられる生き方であると信じます。